

オフィスラブは蜜の味

目次

オフィスラブは蜜の味

5

番外編 縁結びの神様

269

オフィスラブは蜜の味

「あの花屋が目印ですよ。あそこを左に入つてすぐのピンクのビルです」

駅の改札を出て最初の信号で立ち止まると、私の隣に立つ派遣会社の女性担当者が言った。顔を上げると、すぐに賑やかな商店街の中にある花屋が目に入る。

私、諏訪優子は今、派遣会社の担当さんと共に、面接に向かうところだ。

時刻は午後二時前。電車を降りてからまだ歩いていないのに、早くも額にじんわりと汗が滲む。

私は手に持ったハンカチで汗を押さええると、目を細めて空を見上げた。梅雨明けしたばかりの晴れ渡った空から、じりじりとした日差しが降り注いでいる。

同じくハンカチで汗を拭っていた担当さんが、私の顔を覗き込んで聞いてきた。

「緊張しますか？」

私はこくりと頷いた。

私は二十四歳になるというのに働いた経験もなければ、仕事に役立つような資格や特技も持っていない。不安に思つてそれを伝えると、担当さんはニッコリ微笑んだ。

「先方は経験の有無を条件にはしていませんので、その点は大丈夫です。精一杯やる気と熱意をアピールして、笑顔で頑張りましょう！」

やる気と熱意と笑顔。その通りだ。何の取り柄もない私は、せめて自分でできる精一杯の対応をしなければ。この暑い中、隣を歩いている彼女はもろろんのこと、面接のために時間を取ってくれた先方の会社にも申し訳ない。

私は彼女に安心してもらえるように、そして自分を励ますように、とびきりの笑顔で言った。

「ありがとうございます。頑張ります」

すると、担当者さんも笑みを浮かべて、小さなガッツポーズを作ってくれた。

私は幼い頃に両親を亡くし、祖母に育てられた。

その祖母も、私が大学四年の時に体調を崩し、懸命な治療と看病の甲斐なく他界してしまった。誰より大切な祖母が亡くなり、私はしばらくの間何も手につかなかった。けれど、こんな私を見たら、きっと祖母は心配して悲しむ。そう思った私は、一日も早くきちんとした社会人となって、天国の祖母を安心させようと決意したのだった。

けれど現実はある以上には厳しい。職探しを始めたものの、正社員として応募した全ての会社が不採用だった。

そこで初めて、自分には人にアピールできるような取り柄がないということに気付かされた。途方に暮れた私は、藁にもすがらる思いで派遣会社に登録した。そして紹介予定派遣として、初めて紹

介されたのが今向かっている会社だった。

紹介予定派遣とは、派遣社員として一定期間働き、仕事ぶりが認められれば正社員になれるという制度だ。

頑張つて働けば、私でも正社員になれるかもしれない。しつかりやろう！

「前向き、前向き……」

私は心の中で祖母の口癖を繰り返す。辛いこと、悲しいこと、困ったこと——何かあるたびに、祖母は呪文のように「前向き、前向き」と呟つぶやいていたのだ。

私は、信号が青に変わった横断歩道を、ピンと背筋を伸ばして歩き始めた。

『フォリス空間デザイン』は、一階におしゃれなレストランが入ったビルの二階にあった。面接のために通されたのは、オレンジ色を基調にした明るく美しい部屋。柵にはミニチュアの模型が飾られ、壁には素材見本が整然と並んでいる。

ほどなくして男性二人が現れ、私は緊張でドキドキしながら立ち上がった。そして、彼らから名刺を受け取り驚いた。

この人たちが社長と副社長!?

目の前の二人は、揃って三十前後とかなり若い。おまけにタイプはまったく違うものの、どちらも相当なイケメンだ。

社長の武田誠たけだまことさんは、切れ長の目にスッと通った鼻筋、意志の強そうな眉と唇を持った精悍せいけんな顔

つきの美形だ。上品なスーツにパリッとしたワイシャツとブルーのストライプのネクタイを合わせた服装は、いかにも仕事のできる青年実業家という感じがした。

それに対して副社長の上杉創一うえすぎあきらさんは、小さい頃はさぞや可愛らしい子供だったろう、と思わせる甘いマスクをしている。しかし、浮世絵風の大きな富士山が描かれたTシャツに、スウェット地のハーフパンツというラフな服装をしていた。

思わぬイケメン登場で、ますます緊張してしまう。そんな私の目の前に社長、その隣に副社長が座った。

履歴書に目を落とす社長は、きりつと整った面立ちのせいか、とても厳しそうに見える。背も高いので、ただ前に座っているだけでかなりの威圧感だ。

そのせいか緊張に拍車がかかる。頭の中がだんだん白くなり始め、息苦しいような気さえしてきた。

そんな中、顔を上げた社長と目が合う。凛々りんりゃしい瞳に射すくめられて、一瞬、私の呼吸が止まった。

すると社長がふつと表情を緩める。優しくそうに下がった目尻。

途端に、社長から威圧感が消え去り、私はほつと息を吐いた。

私を見つめる社長が小さく頷く。

そんなに緊張しなくても大丈夫——そう言われているようで、私の肩から力が抜けた。

我ながら単純なんだけど、たったそれだけのことで、この社長のもとで働けたらいいな、なんて

思ってしまった。

「本日はお越しいただきましてありがとうございます」

履歴書を読み終えた社長が、低く穏やかな声で話しかけてくる。

「我が社は、名前の通り空間を総合的にプロデュースする会社です」

総合的にプロデュース……今ひとつぴんとこなかったけれど、私は神妙な顔で頷いた。

「建物や部屋のデザインから、商品やサービスのアイデアまで依頼に応じて提案しています。また、企業のロゴマークやホームページの作成、時には商品のパッケージデザインなども請け負うことがあります」

今度は理解できた。自信を持って、はい、と頷くと、社長が顔をほころばせる。私の目を見ながらゆっくり話してくれる社長の態度に、なんだか安心する。

続けて、志望動機やパソコンのレベル、残業への対応などについて質問された。それらに答えつつ、今日の面接はちよつと違うなど感じる。

私が今まで受けた面接は、もつと事務的だったり威圧的に感じるものが多かった。けれど今は、相手が真剣に私の言葉に耳を傾けてくれてるのがわかる。

そのせいか、自然と私の応答にも熱意がこもるようになっていた。

ふと社長の隣に視線を向けると、ずっと黙ったままの副社長がじつと私を見つめている。副社長は私と目が合うと、途端に人懐こい笑みを浮かべ、気軽な調子で話しかけてきた。

「ねえねえ、お花とかお茶とかできる？」

「えっ？」

「ほらあ、平べったい花瓶にお花挿したり、シヤカシヤカお茶をかき混ぜるやつだよ」

きよとんとしている私に向かって、副社長が言葉を付け加えた。

「ええっと……華道とか茶道のことですか？」

突然の副社長からの質問。しかも想定外の内容に戸惑い、私は首を傾げてそう聞き返した。

「うん、そうそう。華道とか、茶道とか、大和撫子^{やまとなでしこ}がやる、あれ」

それなら一通りできる。祖母が古風な女性だったので、私は当たり前のように、華道、茶道などのお稽古^{けいこ}に通っていたのだ。

「はい、華道も茶道も一通り習っておりました」

「やっぱり！ そんな感じがしたんだ」

私の答えを聞いた途端、副社長は顔を輝かせて隣の社長に顔を向けた。

「お花やお茶ができるんなら、大和撫子まぢがいなしだよね？ ね、マコツちゃん!!」

大和撫子……？ どういうことかしら？

私も戸惑ったが、社長もいぶかしげな顔で副社長を見ている。だが、すぐに真顔に戻った社長が面接を続けようとすると、副社長が社長の腕を掴んで叫んだ。

「この子にしようよ!!」

社長がギョツとして副社長を見る。そしてすぐに、呆然としている私たちに視線を向けると、その場を取り繕うかのようにコホンと一つ咳払いをした。

「……では、検討して、近日中にご連絡いたします」

再び何か言おうとした副社長を遮るように、社長は言葉を継いだ。

「本日はありがとうございます」

唐突に面接が打ち切られ、私はポカンとして、隣に座る派遣会社の担当さんを見た。彼女も同じようにポカンとしていたが、すぐに我に返った様子で頭を下げた。

「こちらこそありがとうございます。よろしくお願ひします」

それを見て私も慌てて頭を下げる。そして消化不良の気持ちのまま、担当さんと顔を見合わせたのだった。

その日の夕方、派遣会社から私の採用が決定したと電話があった。

あんな面接の終わり方で採用されたなんて——と、なんだか狐につままれたような気分で、就業に当たっての説明を聞く。

半年間、派遣社員として働いたのち、会社側と私、双方が合意すれば正社員としての雇用となる。仕事が決まって心底ほっとした。これでやっと社会人としての一歩が踏み出せるのだ。不安もあるけれど、本当に嬉しかった。

それに……これから、あの社長のもとで働けるのだ。私の脳裏に面接の時に見た優しい微笑みがよみがえる。

「よし！ 頑張るぞー！」

働いたこともなければ、デザインのことだつてさっぱりわからない。だけど前を向いて進めば、

きつとどうにかなる。

私は自分を励ますように、「前向き、前向き……」と祖母の口癖を呟いた。

そして週明けの月曜日。

私は、フォリス空間デザインのお洒落なエントランスのインターフォンの前に立っていた。

今日が社会人としての初出勤だ。当たり前だけど派遣会社の担当さんはいない。

新しく始まる日々への期待——というより、未知の世界への不安でドキドキしてしまう。

私は深呼吸を繰り返して、インターフォンの受話器を上げた。用件を告げると、すぐに笑顔の女性が現れ、私を中へ案内してくれた。

トイレや給湯室が並ぶ廊下を通り抜けるとデスクスペースが広がっている。その先、突き当たりのドアを女性がノックした。ドアプレートの社長室の文字を目にし、にわかに緊張が高まる。

部屋に入ると、正面のデスクにいる社長がこちらに視線を向けた。

私は深く頭を下げる。

「おはようございます。本日からお世話になります」

「諏訪さん、お待ちしております。今日からよろしくお願ひします」

社長はそう言って立ち上がると、こちらに向かって歩いて来る。

仕立ての良さそうなスーツを着こなす社長は、キリッと整った顔に柔らかな笑みを浮かべている。

そのイケメンぶりについて見惚れてしまい、慌てて我に返って頭を下げた。

「こ、こちらこそよろしくお願いいたします」

勤務初日でドキドキしていた胸が、ますます高鳴るのを感じた。

こんなステキな社長のもとで働くことができるのは嬉しいけど、ドキドキすぎて困ってしまふ。促されて応接セットのソファに座ると、向かいに座った社長がテーブルに載っていた冊子を手に取った。

「これは我が社の作品集です。まずは、うちの仕事について、少し説明させていただきますね」社長が表紙を開く。そこに視線を落とした途端、私の目は釘付けになった。

「これは、関西にある恐竜博物館内のレストランの写真です」

ジャンゲルのような薄暗い空間に、ゴツゴツとした石が積まれた壁と、大きな足跡のついた床。観葉植物の葉陰から覗くのはスポットを当てられた恐竜のオブジェだ。

こんなレストランなら、子どもは大喜びだろう。大人だって楽しみに違いない。

「凄いですね……見ただけでワクワクします……」

思わずそんな言葉が零れ出た。満足そうに頷いた社長が続けてページをめくると、そこには昭和時代初期のような商店街の写真が載っていた。

「なんだろう……見覚えがあるような……」

「そうだ！ 祖母が元気だった頃に、日帰り旅行で立ち寄った高速道路のサービスエリアだ！」

嬉しくなった私は、勢い込んで言った。

「私、このサービスエリアに行ったことがあります！ 凄く楽しくて、一緒に行った祖母もとても

喜んでいました」

すると、目の前の社長が嬉しそうに微笑んだ。その笑顔に思わず見惚れてしまう。

「これらは副社長の上杉の仕事です。彼は今では、空間デザイナー界の天才とか鬼才なんて言われていますが、上杉が注目されるようになったのは、このサービスエリアの仕事がきっかけでした」

私は、面接の時に会ったラフな印象の副社長を思い出す。そんなに凄い人だったんだ！

「時には、こういった大きな商業施設を手掛けることもあります。我が社のメインはオフィスや店舗をプロデュースすることです」

促されてページをめくると、そこからは美しい照明に照らされたオフィスの写真が続く。どれもこんな場所で働いたら……と憧れるような洗練された空間だ。

状況も忘れて素敵な写真を眺めていると、あるページで手が止まった。私は顔を上げ、キョロキョロと周囲を確認し、再びページの写真を目を落とす。

「おわかりになったと思いますが、その写真はこの部屋です」

笑いを滲ませた社長の声に、私は赤くなりながら再び部屋と写真を見比べた。

モノトーンでまとめられた都会的な部屋は、照明や小物が絶妙に配置されていて美しい。シンブルだけど、スポットを当てられた棚のミニチュア模型がアクセントになっていて、遊び心もある。

ここは洗練されたイメージの社長にぴったりの部屋だった。美しくデザインされているだけではなく、使う人が入って初めて完成する——そんな印象を受ける。

「この部屋は、使う人に合っていますね」

私を感じたままを口に出すと、目の前の社長は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに口元をほころばせた。

「この部屋は、私のデザインなんですよ」

私は納得して頷いた。なるほど、どうりで社長の雰囲気とマッチしているはずだ。

「副社長と社長のお仕事は、ずいぶん雰囲気が違うんですね」

社長は私の言葉に頷いて、笑いながら言った。
「上杉はこういった仕事はしません。彼は自分が面白いと感じたり、身を置きたいと思う空間のデザインしかしないんです」

社長のその言葉に、妙に納得してしまう。確かに副社長にはそんな印象を受けた。

「我が社では、より良い仕事にするために全員で意見を出し合っています。諏訪さんも今日から私たちの仲間です。どんな意見を出していつてください」

「わ、私も……ですか？ 私はデザインについてはまったくの素人ですし……」

「先ほどのレストランもサービエリアも、楽しむのはデザインのことなんて知らない普通の人々です。それに女性の意見は貴重なんですよ。さつきみたいに思ったことを聞かせてください」

社長に優しく微笑みかけられて、気付けば、はい、と頷いていた。

「諏訪さんにはスタッフのサポートを……特に上杉のサポートをお願いしたいと思っています。彼が仕事をするようにフォローしてください」

——副社長が仕事をするように？ 仕事をするのは当たり前前の事ではないのだろうか？

きよとんとして社長を見ると、彼は神妙な顔で続けた。

「上杉は……才能はあるのですが、社会人として色々と問題があるヤツでして……」

社長はため息をついて、私に向き直った。

「上杉の仕事は、我が社の誇りです。くれぐれもよろしくお願いします」

私に何ができるのかわからないけれど、前向きにどんな仕事でもやる！ と決意してここに来た。

「はい。頑張ります」

笑顔で頷く私を、社長は少し目を細めて見ていたが、すぐに腕時計に目を移す。

「もう九時を過ぎましたね。では、我が社のスタッフを紹介しましょう」

社長から紹介された私を迎えてくれたのは、六人の男女だった。

「諏訪優子です。不慣れなため、ご迷惑をおかけすることも多いと思いますが、よろしくお願いします」

「よっ！ 待ってました！」

賑やかな掛け声と共にパチパチと拍手が起こり、明るい雰囲気、ほっと息をつく。

社長が右端の女性に向かって軽く頷いた。明るい色の巻髪、白いブラウスにオレンジ色のスカートに付けた華やかな美人だ。

「社長秘書の直江です。よろしくお願います」

二十代後半かな？ 落ち着き払った声と態度、凜とした表情はいかにも仕事のできる女性といっ

た印象だ。

続けてその隣に立つ四十代くらいの男性が、「じゃ、次は俺ね」と手を上げた。

「事務長の石田です。私がこの会社で一番年上です。あのね、慣れれば大丈夫だから。一緒に頑張ろうね」

笑みを浮かべた石田さんがほのぼのとした口調で言い、続けて、先ほど私を社長室へ案内してくれた女性が口を開く。

「大谷です。植物プランナーだけど、事務補助も営業補助もやっています」

石田さんより少し年下のように思える。はきはきとした口調で、明るく元気なお姉さんというイメージだ。

「はい、これ。杉ちゃんの搜索地図。だいたい会社から徒歩五分以内の円の中にいるから」

彼女は、うふふ、と笑いながら、一枚の紙を差し出した。

杉ちゃん……は副社長の上杉さんの事だとすぐに思い当たるが、搜索地図？

私が首を捻りながら受け取ったそれは、手書きの地図だった。戸惑って顔を上げると、大谷さんは私の手元を指さし得意げな顔をした。

「慣れるまで、きつとその地図が役に立つわよ！ よろしくね」

ポカンとした私を置いてきぼりにして、大谷さんの隣に立つ男性二人が進み出る。

「佐藤です。営業兼ウェブデザイナーってことになってますが、基本なんでもやります。よろしくお願いします」

「右に同じくなんでもやる加藤っす。自分は3Dデザイナーと営業っすね。よろしく」

私よりいくつか年上という感じの二人は、揃ってちよつとぼつちやり体型でメガネをかけ、チエック柄のシャツを着ている。なんだか似ているなと思っていると、すかさず大谷さんが言った。

「この二人、似てるでしょ？ 佐藤が黒メガネ、加藤が緑メガネだから、『佐藤は黒砂糖』って覚えればいいのよ。面倒だったら二人まとめてパソコンでいいわよ」

すると、加藤さんが苦笑いを浮かべた。

「大谷さん、酷いっすよ。それ、売れないお笑いコンビみたいじゃないっすか」

そのやり取りに笑ってしまった。みんな仲が良さそうだ。

「私たちからはこれを……」

佐藤さんが遠慮がちに、数枚の用紙を差し出してくる。首を傾げて受け取ると、それは何かの一覧表のようだった。

「慣れるまでは大変だと思うんで、一覧表にしておきました。左が上杉さんの字で、右の文字に対応しています」

驚いて顔を上げた私に、今度は加藤さんが明るく声をかける。

「これでやっと上杉さんの字から解放されるっす。いや、ありがたいつす」

もう一度、手元の一覧表に目を落とすと、平仮名、カタカナ、数字に漢字、アルファベットが続いている。それぞれの文字の左側は、まるでミニミズ体操のような文字！

「これが副社長の字……」

思わずそう呟いた私に向かつて、当の副社長が声をかけた。

「副社長なんて堅苦しいな。杉ちゃんって呼んで。待ってたよお、優子ちゃん」
ゆ、優子ちゃん？ いきなり名前で呼ばれて驚いてしまう。

副社長の上杉さんは、ニコニコと私を見ている。

「で、では、上杉さんと呼ばせていただきます」

私がそう答えると、え、と子供のように口を尖らせた。

そんな副社長を視線だけで黙らせた社長が、その場をまとめた。

「ご覧の通り少人数の会社です。全員で助け合わないと我が社は立ち行きません。仕事でわからない点があれば積極的に聞いて、早く慣れてくださいね」

私は、はい、と頷いたあと、もう一度深く頭を下げた。

「みなさん、よろしくご指導ください」

再び起こった拍手の中、顔を上げると全員が笑顔だった。初めての仕事に不安がないわけではなけれど、職場の温かな雰囲気には胸を撫で下ろす。

そのまま全員揃って大きなテーブルに座り、ミーティングが始まった。毎朝行われるミーティングで、それぞれの仕事の状況や、今日の予定などを報告し合うのだそうだ。

私にまず与えられた仕事は、上杉さんの机回りの片づけだった。

ミーティング終了後、隣のデスクスペースへ向かったが、大谷さんに連れてこられた机の前で、

呆然と立ち尽くしてしまった。

これが上杉さんの机……

机の上も下も、どう見ても仕事で使うとは思えないもので埋もれていた。山のように積まれた衣類や、ごみとしか思えないスナック菓子の袋、それにシェーバー……亀のエサなんでものまである。隣に立った大谷さんが、申し訳なきそうに言った。

「ここんとこ、ちょっと忙しかったから放置しちゃって……」

言葉もなくその山を見つめていると、頭上から素敵なバリトンボイスが響いた。

「諏訪さん、頼りにしています」

その瞬間、私は脳天から背中にかけて電流が走ったように、背筋をピンと伸ばした。

ああ、社長！ 声もステキだわ。

私は即座に振り向き、はい、と答えていた。我ながら、なんて単純なんだろう。

すると社長は、すつと身を屈め、私の耳元で囁いてくる。

「ざつとでいいですからね……」

そう言ってニコリ笑う社長に目を奪われた。社長室に戻って行く後ろ姿を見送っていると、俄然やる気が湧いてくるから不思議だ。

早速、大谷さんの指示のもと片づけが始まった。大谷さんは私と上杉さんにテキパキと指示を出し、山をどんどん崩していく。

「はい、杉ちゃん、これ自分のロッカーか部屋に運んで」

大谷さんに言われ、上杉さんは両手いっぱい衣類を抱えてどこかへ向かっていく。

私も彼女の指示に従い、書類をファイリングしたり、書籍を棚に並べたり、様々な文房具を元の場所に戻したりした。そのおかげで、ファイル棚やキャビネットの様子が頭に入ってくる。

そうして一時間もかからずに、上杉さんの机回りはきれいになった。一つの仕事をやり終えたという達成感を感じて、嬉しくなる。

私は掃除が好きじゃなければいけないけれど、きつちりとした祖母に育てられたせいで片づけは得意な方だ。社長からも頼りにしていると言われたことだし、これからは上杉さんの机の上に絶対に山は作らないぞ、と決意した。

大谷さんに社内を案内してもらいながら、次に向かったのは会議室。この会社には会議室が二つあり、そのうちの一つは私が面接を受けた部屋だ。大谷さんはそこをオレンジルームと呼び、もう一つの会議室の引き戸を開けながら、「ここは杉ちゃんち」と言う。

……杉ちゃんち？

首を捻りつつ、その部屋の中に足を踏み入れた私は、息を呑んでその場で固まってしまった。

杉ちゃんちとは、ぐちゃぐちゃに散らかった和室のことだった。

ここは本来なら、銀閣寺の書院造の間のような、シブい雰囲気だったことが窺える。だけど、今の漫画や衣類が散らばる様子は、さながら男子学生の下宿部屋といった感じだ。

「見ただけで、うんざりするでしょ？」

大谷さんは思い切り顔をしかめてそう言うのと、靴を脱いで畳に上がり奥の丸窓の障子を開けた。

「和室もあるんですね。驚きました」

「うちのオフィスって、実はモデルルームも兼ねてるの」

そう言われて納得した。確かに社長室もオレンジルームも美しい。

「この和室はね、モデルルームだけじゃなく、私たちの休憩スペースにもなってるの。忙しい時は泊まれるし、凄く便利だったんだけど……」

彼女はそう言って、掘りごたつ式のテーブルの下から、空のペットボトルを拾い上げた。

「いつの間にか杉ちゃんが住み着いちゃったのよ」

「上杉さんの家って、遠いんですか？」

「ここから三十分くらいだから、それほどでもないわ。でもね、これはこれで助かってる部分もあるの。だってここにいれば絶対遅刻しないでしょ。だから、もうみんな諦めて、和室を杉ちゃんちなんて呼んでるのよ。社長もここにお客様を通すのは諦めてるしね」

大谷さんはそう言って力なく笑った。

「悪いんだけど、私、そろそろ仕事に戻らせてもらわね。杉ちゃんに掃除機運ばせるから、諏訪さんはここを片づけてくれるかしら？ わからないことがあったら聞いてね」

大谷さんは、ひらひらと手を振りながら和室から出て行った。

部屋に一人残された私は大きなため息をつくとき、腰に手を当ててぐるりと部屋を見回した。

畳の上には座布団と丸まったタオルケット。奥の趣のある床脇にはセンスのいい壺が置かれているけれど、上にお風呂道具の入った洗面器が載せられていて雰囲気ぶち壊しだ。

——前向きにどんな仕事でもやる!

私は自分に言い聞かせるようにして覚悟を決めると、「前向き、前向き」と呟きながらごみ袋を取りに倉庫へ向かった。

和室を片づけ終わりデスクに戻ると、すでに正午になろうとしていた。

昼食は、大谷さんに近所を案内してもらいがてら、コンビニでお弁当を買ってくる。

「せっかく掃除してくれたことだし、杉ちゃんちで食べましょう。やっぱり和室つくろげるしね」

大谷さんの言葉に頷き、一緒に和室に向かう。

「うわ、何これ!? 凄くきれいになったわねえ!」

引き戸を開けた瞬間、大谷さんが感嘆の声を上げた。頑張った私としては、嬉しくなる。

「ぜひこれをキープしたいわねえ……。そうだ! その壺にお花を飾りましょう!」

腕を組んで部屋を見やっていた大谷さんは、ぽんと手のひらを叩いて、床脇にある壺を指さした。

「そうすれば、少なくとも壺の上に洗面器は載らないわよね」

彼女はニツと笑う。そして私に、午後一番で角の花屋で花を買い、壺に花を生けるよう頼んだ。

それから、テーブルでお弁当を食べつつ、大谷さんと話しているうちに、いつしか話題は社長のことになった。

「うちの社長ってイケメンだと思わない?」

軽い口調でそう聞かれドキリとする。一瞬、肯定してもいいものかと迷ったけれど、ここは否定するほうがおかしいだろう。だって、誰がどう見ても社長はイケメンなのだから。

「そうですね、カッコいいですね」

私の答えに、彼女は満足そうな顔をして頷いたあと、しみじみと呟いた。

「でも独身なのよねえ……」

上杉さんと加藤さん、それに直江さんも独身なのだそう。

「社長ってあの見た目でしょ、他社の女の子からもすっごく人気だね」

そうよね……。やっぱり社長はとてつもなくモテるんだろうな。

「でも最近、あそこの社長は顔と愛想はいいけどイケズだって言われているのよ。イケズメン、なんてあだ名まで付けられちゃって……。あははっ」

「いけずめん……?」

聞き慣れない言葉に首を傾げると、大谷さんは笑いながら説明してくれた。

「イケズなイケメン、ってことよ。イケズって関西弁で意地悪って意味なのね。好き好きって迫られても、まったく相手にしないからそう言われ始めたみたい。それにね……」

彼女は少し声を落として続けた。

「イケメンのくせに凶面にしか興味がない変人、っていう裏の意味もあるみたい。そのくらい仕事ばっかりなのよ。あれじゃ、カノジョなんてできないわね」

社長は独身で、カノジョもない……。そう聞いた途端、気持ちが勝手に浮き立ってしまう。

「堅物なのよね、うちの社長。デザインを見ると性格がわかるわ。社長が固すぎるのか、杉ちゃんが柔らかすぎるのかわかんないけど、ホントあの二人っていいコンビなのよね」

社長って堅物なんだ……そうは感じなかったな。そんなことを思いながら、私は大谷さんが教えてくれる社長の話を夢中になって聞く。すると、大谷さんがサラッと言った。

「あなたって素直ね。社長のこと気になる？」

私は箸を落としそうになった。顔が火照るのを感じる。

「私、五歳の息子がいるんだけど、嬉しい時とか、もしシッポがあつたら後ろでパタパタ振ってそうなのね。諏訪さんもそんな感じがするわ。かわいーワン！」

恥ずかしい！ もしかして社長のこと意識してたのバレバレだった!?

私は赤くなりながら大慌てで言い訳した。

「ス、ステキだなんて思いましたけど……あの、でも、そう思っただけです！」

「諏訪さんは付き合ってる人いるの？」

私が急いで首を横に振ると、大谷さんは不思議そうに首を傾げた。

「なら、そんなに必死で否定しなくたっていいんじゃないの？ 二人とも独身で付き合ってる人もないんだから。……ふふっ、もし社長を狙うんなら応援するわよ！」

大谷さんはそう言っ、身を乗り出してくる。

「じゃ、社長みたいなステキな人、私には無理ですから……」

「若いのに何言ってるの！ そんなんじゃ、いつまでたつてもカレシなんてできないわよ！ あの

イケズメンをその気にさせるのは難しいかもしれないけど、私も協力するから。頑張って！」

焚き付けるように言ってくる大谷さんに、私は勢いよく手を振った。

「そんな……やめてください。社長と付き合うだなんて……恐れ多くて考えられません。見ているだけで十分です」

その言葉に大谷さんは拍子抜けしたような顔をした。私は赤くなる顔を誤魔化すように頭を下げた。

「今は恋愛より早く仕事を覚えることの方が大事なんです。だから、色々教えてくださいね」

「奥ゆかしいわね。杉ちゃんが、大和撫子が来るって言ってたけど本当ね」

大和撫子!?

そういえば、上杉さんは面接の時にそんなことを言っていた。私ごときが大和撫子と呼ばれるなんて恥ずかしくなる。

大谷さんは時間を確認すると、「いけない、おしゃべりしすぎたわね」と言って大急ぎで箸を動かした。私も食べながら、ぼんやり社長のことを考える。

社長は確かに魅力的だ。だけど、お付き合いを考えられるほど、私は恋愛に慣れていない。

中学から大学まで、女ばかりの環境で過ごした私は、ほとんどと言っていいほど男性経験がない。辛うじて、高校時代にままごとみたいなお付き合いをしたことがあるくらいだ。

大学の時、友人に誘われて合コンに行ったこともあったけれど、みんなのノリにまったくついていくことができず、二度と行こうとは思わなかった。

だけど……脳裏に優しく笑う社長の顔が浮かんだ瞬間、胸の奥がきゅっと苦しくなる。そんな自分に戸惑いつつも、きつと桁違いなイケメンにドキドキしているだけだ、と無理矢理自分を納得させた。

今は何より仕事が大事！
私を採用したことを後悔されないように、午後もしっかり頑張らなくっちゃ！

私は午後一番で花屋へ行き、和室に花を生けてデスクスペースに戻った。するとそこには、パソコンを覗き込む社長の姿が！

社長は上着を脱いでシャツの袖をまくっている。スーツをきつちり着ている時とは違うラフな様子に、うっかりときめいてしまった。

私は慌てて目を逸らし、平常心平常心！と自分に言い聞かせる。

自分の机に座り、午前うちに設定してもらったパソコンを起動させていると、大谷さんが興奮した様子で話しかけてきた。

「諏訪さん！もしかしてあれってレジ横の？」

すぐには意味が掴めず目を瞬かせていると、奥の机に座っている石田さんが私の代わりに返事をした。

「えー、三百八十円が二束で七百六十円だね。なに？いい感じなの？」

私が渡したレシートを見ながら答えるのを聞いて、ああ、和室のお花のことねと合点がいった。

私が買った花束は、花屋のレジ横にあったお買い得品だ。

床脇の大きな壺には、涼しげなブルーのルリ玉アザミとシュツと伸びた蘭の葉を挿し、残りの花は上杉さんの小物入れになっていた水盤にアレンジして生けた。花の量は少ないけれど、逆にいい感じのワビサビが出たと思う。

「もうー、どこのお茶室って感じよ！杉ちゃんの住処にしておくのはもったいないわ」

大谷さんの言葉に、私以外の全員が和室に行ってしまった。

廊下の奥から、どよめきと歓声が聞こえてくる。私は嬉しいような恥ずかしいような、なんともいえない気持ちになった。

「あれなら泊まり込みの時、畳の上で寝られるかも——」

「——寝袋だって、床より畳の上の方がいいよな」

ガヤガヤとした会話と共にみんなが戻ってきて、労いと感謝の言葉をかけてくれる。さらに、満面の笑みを浮かべた社長もやってきた。

「本当に驚きました！あの部屋があんなにきれいになるなんて。ありがとう諏訪さん」

その笑顔を見た途端、私の胸がキュンと疼いた。

心臓がドキドキとうるさい。自分の顔が赤くなっていくのがわかる。

「これからも、よろしくお願いしますね」

社長に見つめられ、私はなんとか「はい」と答えたものの、声が上がってしまった。

「社長、うちのサイトから消した和室の画像、またアップしましょうよ」

「ああ、そうですね。あれならお客様にもお見せできます」

社長の明るい声を聞いているうちに、私でも役に立てたんだと嬉しくなった。掃除も生け花も、手ほどきしてくれた祖母に感謝だ。

よし！ どんな仕事も精一杯頑張ろう。気持ちを新たに、私は午後の仕事に臨んだ。
次に任されたのは、上杉さんの書いた文章を入力していく仕事。

上杉さんの文字は、想像以上に酷い癖字だった。解読に難儀しながら、最初に貰った文字表を参考にして入力していく。もともとパソコンは得意でないため、思った以上に時間がかかっていたが、途中でふとあることに気が付いた。

上杉さんの文字って、草書体みたい……

草書体というのは書道の書体の一種で、文字を早く書けるように形を崩して簡略化したものだ。上杉さんの一見ミミズの絡まり合ったような文字も、頭に浮かんだ考えを猛スピードで文字にしたために簡略化されているのだとしたら？

草書体は人によって癖が出る。上杉さんの文字も、かなり癖の強い草書体だと思えば読みこなせるかもしれない。そう思った私は、手元の文字表と照らし合わせながら上杉さんの癖を掴んでいく。今でも手習い続けている書道が、こんな場面で役に立つなんて思わなかった。どうにかかなりそう嬉しくなる。

その後終業時間まで入力作業を続け、慌ただしい一日を終えた。

帰りの電車に乗ると、ほっと安堵の息が漏れる。初めての仕事には戸惑うことも多かったけれど、皆いい人たちで続けていけそうだ。
ぼんやり窓の景色を眺めながら、いつの間にか私は社長のことを考えていた。かけられた言葉を思い出しても、勝手に頬が緩んでしまう。

この時、すでに私は社長に恋をしていたのだろう。だけど、高望みとしか思えない恋に、仕事の方が大事だ、なんて自分に言い聞かせていたのだった。

昨日は大きな不安を抱えて通った道を、今朝は足取り軽く歩く。

バッグの中にエプロンを入れた私はヤル気満々だ。始業と同時にエプロンを身に着け、あちこちをピカピカに掃除した。

その後、パソコンに向かって昨日の入力作業の続きを始める。

「入力はどう？ 上杉さんの文字、解読できそう？」

黙々とパソコンに向かってっていると、佐藤さんが声をかけてくれた。

私は、ひとまずできたところまで、佐藤さんに確認してもらおう。彼はデータに目を通しながら、驚いたような声を上げた。

「えっ……こんなに進んだの!？」

「は、はこ」

私はおぼろげと、上杉さんの文字の癖が草書体と似ているということの説明した。

「俺の字が読めるの!？」

突然、頭の後ろから声が出てビックリする。いつの間にか上杉さんが私の後ろに立っていた。

「上杉さんの字が草書……そう言われて見ると、確かに芸術的に見えなくもないかも？」

佐藤さんが、上杉さんの書いた書類を顔に近づけたり離したりして眺めている。すると上杉さんが、その書類を奪い取りヒラヒラさせながら言った。

「優子ちゃんは俺と芸術的センスが同じなんだよ！」

そんなことを言われて、思わず微妙な笑みが浮かんでしまう。

その時、社長室のドアが開いた。

「上杉、急ぎのラフスケッチがあるの、忘れてないだろうな？」

社長が上杉さんにそう声をかけながら近づいてくる。途端に上杉さんはビックリと肩を揺らした。

「大丈夫だよ。立面図と断面図のラフは終わってるし、平面図もあとちょっとだから」

社長はその言葉を聞くと、モニターに向かうパソコンビに尋ねた。

「加藤さん、進捗状況は？」

「もうすぐ立面図の入力終わるところス」

「佐藤さんはどうですか？」

「今、断面図の文字を確認しています」

現れると同時に、ときはきと状況を確認していく社長に、二人は神妙な顔で返事をしている。

社長たちが話しているのは、きつとネイルサロンの改装案の図面のことだろう。今日の午後、先方の社長と確認作業をする、と今朝のミーティングで話していた。

「これは？」

社長の声に顔を上げると、社長が上杉さんの手から書類を取り上げるところだった。

「あ、あの、私が今入力している書類です」

慌てて立ち上がると、社長は書類に目を落としてため息をついた。

「相変わらず酷い字だな……。諏訪さん、大丈夫ですか？」

私が頷くと、社長は、「頼みます」と、ニッコリ微笑んで私に書類を手渡した。それから、上杉さんの両肩をがっちり掴んで無理やりイスに座らせる。

「上杉は今すぐ平面図のラフを仕上げるんだ」

「ちえっ、大丈夫だって言ってるのに。マコツちゃんは心配性なんだよ……」

ブツブツ文句を言う上杉さんにかまうことなく、「みなさん、お願いしますね」と言い残して、社長は部屋に戻った。みんなも各々の仕事に戻る。

社長が来て少し話をしただけで、作業スペースの空気が引き締まった。凄いなあ、と感心してしまふ。

おまけに、社長の微笑みは、私の心臓の鼓動を速くさせただけでなく、やる気までアップさせてくれた。私は書類を手に、再びキーボードに向かい始める。

しばらくして、入力作業を続ける私に、加藤さんが声をかけてくる。

「もしかして……上杉さんいないっスか？」

えっ？　と思つて隣を見ると、図面が広げられたままの机には誰もいない。

「平面、終わってるんらいんすけど……」
加藤さんは上杉さんの机の上をガサゴソと漁り始めた。

「……ああ……やっぱ終わってない……」

私は急いで行動予定を書くホワイトボードを確認したけれど、上杉さんの欄には何も書かれていない。加藤さんが諦め口調で言う。

「上杉さんは逃亡先を書いたりしないっすよ……」

「——上杉は？」

振り返ると、社長がキョロキョロと辺りを見回しながら近づいてくる。加藤さんが、逃亡しましたと答えると、社長の顔色が変わった。

「平面のラフは、上がってますか？」

加藤さんは、手に持った図面を社長に見せて首を横に振った。

「今から諏訪さんを探しに行つてもらうとこっす」

えっ？ 私が探しに？

一瞬驚いたが、すぐに思い当たった。昨日、大谷さんから貰った地図は、こういう時に使うためのものだっただ……

社長はため息をつくくと、私の顔を見て言った。

「諏訪さん、お願いしますね」

「は、はい」

急いで支度すると、杉ちゃん搜索地図を手の外に出た。会社を出たところで地図を広げると、この時間帯は、魚の湯のコインランドリーか、その先の神社にいる可能性が高い、と書いてある。

とりあえず私は、駅とは反対方向にある魚の湯という銭湯へ急ぎ足で向かった。

ほんの二、三分で着いた魚の湯は、古びたビルだった。顔を上げると屋上に煙突らしきものが見える。敷地の一角に、自動販売機と植木鉢に囲まれた掘っ立て小屋みたいな建物があり、壁に真っ赤なペンキで『コインランドリー』と書かれていた。

開けっ放しの引き戸から中を覗くと、将棋盤を挟んでオジサンと向かい合う上杉さんがいて、ほっとする。

私はオジサンに、こんにちはは、と挨拶をしてから、上杉さんに声をかけた。

「上杉さん、迎えに来ました」

「おや、搜索隊長が代わったのかい？」

オジサンが私の顔を見て言ったが、上杉さんは将棋盤から顔も上げずに答える。

「そう、優子ちゃんって言うんだよ」

腕組みをして難しい顔で将棋盤を見つめ続ける上杉さんは、動く気がないようだ。

「みなさんお困りですよ。戻りましょう……」

「う〜ん……」

私への返事ではなく、将棋の手を考えて唸っているのだろう。

「上杉さん、社長が待ってますよ！」

思わず強い口調になると、上杉さんはやつと将棋盤から顔を上げた。そして、ニヤニヤしながら言う。

「優子ちゃん、マコツちゃんのためだからそんなに必死なの？」
な、なんてことを！」

私が真っ赤になって言葉を失っていると、オジサンが声を上げた。

「はい王手！」

上杉さんは、「うあ〜っ！」と呻うめいて頭を抱える。

私はこれ幸いと、上杉さんを、急せかして会社へ戻った。

社に戻るなり、加藤さんが駆け寄ってくる。

「上杉さ〜ん、平面図あとちよっとじゃないっすか。頼みますよ〜」

「暑くなる前に洗濯終わらせようと思つてさ〜」

上杉さんは、まったく悪びれる様子もなくそう言うと、のんびりイスに座った。間に合うのだからかと私の方が心配になってくる。

戻ったと報告を受けたのだろう。足早に社長が現れた。

「残るは平面図つと。あと一時間で仕上げるからねえ」

上杉さんがそう言うと、社長は眉を寄せ、少し焦った口調で言った。

「一時間？ ……それだと間に合わないな。ラフを持って行くという手もあるが、最低でもおまえ

の癖字を清書する時間が必要だ。そうしないと先方で読めない」

社長の言葉に、上杉さんはちよっと首を傾かげたあと、私を指さした。

「じゃあさ、優子ちゃんを連れて行きなよ。優子ちゃんは、俺の字が読めるからさ」

「読めるって…おまえの字を？」

社長はさつと図面を持って来ると、その一部を指さした。

「諏訪さん、ここを読んでみてもらえますか」

淡い色の付けられた丸がランダムに並んでいる部分に、絡からまり合い流れるような上杉さんの文字が小さく添えられている。

「…：柱の森。森の中で木が林立するイメージ。…：この柱でワンルーム空間の鉛直力えんちよくりよくと水平力を負担」

私がつつかえながら読み上げると、社長は驚いたようにまじまじと私の顔を覗のぞき込んだ。すると、佐藤さんがさかさず説明を入れる。

「彼女、書道習ってるそうで、上杉さんの字は草書に似ているらしいんです」

「どうりで履歴書の字がきれいだと思います…」

社長はそう呟つぶやいたあと、正面から私を見て言った。

「諏訪さん、急ですみませんが、私と一緒に取引先に行ってもらえますか？」

あまりに突然のことで戸惑ったけど、社長の真剣な様子に思わず頷いてしまう。

社長は安堵したように微笑んで、上杉さんを見て冷静に言った。

「上杉、一時間後だ。頼んだぞ」
「オッケー」

その途端に上杉さんのまとう空気が変わった。社長は、集中する上杉さんの様子を確かめたあと、私に告げた。

「一時間後に車で出ます。今のうちに昼食を済ませておいてください」

私はぎくしゃくと頷いた。社長について行くだけとはいえ、他社に行くのは緊張する。なんだか落ち着かず、昼食がなかなか喉を通らなかつた。

一時間後、上杉さんの平面図は無事に出来上がり、私たちは予定通り会社を出た。

車が動き出すなり、社長が口を開く。

「上杉の字が汚いばかりに、申し訳ありません」

「いいえ、大丈夫です。でも、上杉さん、絵はもの凄く上手ですね」

完成した上杉さんの図面は本当に美しかった。字はミミズ状態なのに、同じ人が同じ右手で描いたものとは思えない。

「そうですね。学生時代から上杉は突出して絵が上手かつたんですよ」

社長の言葉に、私は目をパチクリさせた。

「お二人は大学時代からのお友達だったんですか？」

社長は笑いながら頷くと、大学時代の上杉さんについて話し始めた。さもあらなん、という面白

エピソードに笑っていると、あつという間に取引先に到着する。

打ち合わせの相手は、多くのネイルサロンを経営する女性社長で、ギャル社長として時折雑誌などに取り上げられることもある有名人だという。

社長室へ案内され、社長が中に入ると、女性社長が立ち上がり満面の笑みで出迎えてくれた。

「武田社長！ お久しぶりね」

とても迫力のある女性だ。びつたりと身体にフィットした淡いピンクのスーツを着て、胸もどからはヒョウ柄のインナーが覗いている。クルクルと巻かれたゴージャスな金髪と沢山のアクセサリが顔回りを華やかに彩り、メイクもバッチリだ。

笑顔で社長に歩み寄ってきた彼女は、社長の後ろにいる私に気付いた途端、スッと笑みを消した。社長が私を紹介すると、彼女はかろうじて口角を上げはしたものの、挨拶もそこそこに言った。

「こう見えて、結構忙しい身なの。すぐに見せてちょうだい」

そして自ら二人掛けのソファに座ると、社長に自分の隣に座るように促した。社長は彼女の隣に座り、私は社長の向かいにそっと腰掛ける。

「まだ思案の途中なんです……」

そう前置きしながら社長が図面を広げると、彼女は声を上げて社長に身を寄せた。

「へえ！ こんな感じなのね」

「癒しの空間、というご希望でしたので、改装案は森の中の小屋をイメージしております」

「優しい色彩ね。お客様だけじゃなくてスタッフも癒されそう」

そう言いながら、女性社長は優雅に足を組み、テーブルに身を乗り出すようにして図面を眺めた。そうすると、太ももがむき出しになる上、胸の谷間が強調されてなんとも色っぽい。

恋愛の経験がほとんどない私にもわかる。彼女の色っぽいさは無意識ではない。うちの社長にアプローチしているのは明らかだ。

どうりで先ほどから無視されていると思った。女性社長からまるで私などいないかのように振舞われ、居心地はすこぶる悪かった。

できることなら出番がありませんように……

私はじっと身を縮めて願っていたが、願っても空しく出番がきてしまった。

「申し訳ありません。うちのデザイナーは酷い癖字で……私では正しくお伝えすることができません。私もできませんので、彼女に代わります」

そう言うやいなや、社長はすっと立ち上がって、私に席を代わるよう告げた。女性社長が向けてくる冷たい視線に怯みそうになったけど、ここはいつもの呪文「前向き、前向き」で乗り切るしかない。

私は女性社長の隣に、「失礼します」と言って座った。

目の前に広げられた図面の文字を確認し、指をあてながらゆっくりと読み上げていく。

私が文字を読み上げると、社長がそれに説明を加えていった。

しばらく黙って私たちの説明を聞いていた女性社長が、突然、社長に声をかけた。

「そうそう！ 私、今後の参考になりそうなお店を見つけたの。一度、一緒に見てもらいたいわ。」

レストランんだけど、よかつたら食事でも取りながらどうかしら」

「ええ。ではデザイナーの上杉に伝えておきます。上杉はかなりの人見知りで、あまり外に出ないので、参考になると聞いたら喜ぶと思います」

「上杉……って、そちらの副社長よね？ ……あの個性的な……」

社長がにこやかに頷くと、女性社長の眉間にシワが寄る。

隣に座っている私は、居たたまれない気分だった。彼女が社長を誘っているのはどう考えても明らかだ。社長はわかっている、あんな返事をしたのだろうか？ それとも、まさか天然？

イケズメン——その瞬間、大谷さんが言っていた社長のあだ名が頭に浮かんだ。

こういうところがあだ名の由来なんだ、と心底納得してしまった。

私が二人のやり取りにビクビクしていると、女性社長がフツと息を吐き出し私に話しかけてきた。「諏訪さん、だったわよね？ あなたおいくつ？」

「あの……二十四です」

「へー、私が初めて自分の店を出した年と同じね。あの頃は夢中で仕事をしたわ。どんなに忙しくても、見た目にも気を抜かなくて……」

彼女は目を細めて、私を上から下まで見た。

「私みたいにサロン経営者なんて立場になると、家から一步出るのにも気を抜かないの。でもね、それはOLさんだって同じよ。諏訪さんが、またここに来ることがあったら、せめてネイルぐらい塗ってきてね。ネイルも身だしなみの一部よ」

「あつ……も、申し訳ありません」

私は図面の上から慌てて手を引いた。

社会人としての常識がない——と言われたようで、恥ずかしさのあまり俯うつむいてしまう。私の指先はただ短く爪を切り揃えているだけで、何も塗ったりしていない。それに比べると、女性社長の爪はさすがに美しかった。洋服と色調をあわせてきれいに塗られた長い爪には、ストーンがキラキラと輝いている。

「ああ、もう時間だわ」

女性社長のその言葉で、私たちは立ち上がり社長室をあとにした。

車に乗り込んでしばらくすると、社長が静かに声をかけてくる。

「すみません。イヤな思いをさせてしまいましたね」

すぐに女性社長に言われたネイルの件だとわかった。

「いえ、私の方こそ、申し訳ありませんでした」

社長にも恥をかかせてしまった。そう思っ頭を下げると、社長は慌てたように言った。

「諏訪さんが謝る必要はありません。あなたの身だしなみはきちんとしていると思いますよ」

社長は穏やかな口調でそう言ってくれる。

密かに落ち込んでいた私のことを、気遣ってくれているのだろう。

「ありがとうございます。でも、これからはもう少し気を付けたいと思います」

今日みたいに、私のせいで社長が恥をかいたりするのは嫌だ。

社会人の友人の爪が、きれいに塗られていたことを思い出すと、やっぱり爪くらいは塗っておかないと……と反省してしまう。

「そうですか？ 彼女の周りでは爪を塗るのが普通なのかもしれませんが、本当にどちらでもいいんですよ」

「どちらでも？ そういうものですか？」

社会人としての常識、というものに私は自信がない。

「ウチの会社としては、どちらでも支障はないですからね」

社長はそう言ったあと、少し考えて再び口を開いた。

「個人的にも……やっぱりどっちでもいいかな……」

私は首を傾かげて社長を見た。

「気になる女性がネイルをしていなかったら、料理をよくするのかな、家庭的で可愛くなって思うし……反対にネイルをしていたら、きれいにしてるな、女性らしくて可愛いなって思う」

社長はハンドルを握ったまま、一瞬だけこちらを見て微笑んだ。

「諏訪さんがネイルをしてもなくても、好きだとか可愛いと思うことに変わりはないってことですよ」

「ちよ、ちよと待って！ 今、なんか凄いこと言われたような!？」

「男なんて単純ですからね」

社長は軽く、はははっ、と笑った。けれど、男性に免疫のない私の頭の中はパニック寸前だ。

いやいやいや、私、少し落ち着こう！

一瞬社長が、私のことを好きだとか可愛いとか思っているように受け取ってしまった。社長は単にたとえ話をしただけだ。そうに違いない。

私は、こつそり深呼吸を繰り返す。あまりにドッキリしたせいで、落ち込んでいた気持ちがすっかり吹き飛んでしまった。

私が内心あたふたしていることなど知る由もない社長は、明るい声で続けた。

「諏訪さんは自由にしてくれてかまいませんよ。ウチにはそういう決まりは何もありませんから」「……はい」

胸の鼓動が少し落ち着いてくると、毎朝の掃除のことが思い浮かんだ。自由ならもつとラフな格好でもいいのだろうか。

「あの、服装なんですけど、もっと動きやすい格好でもいいんでしょうか？」

社長はチラリと私に視線を向けた。私は、白いシャツにベージュのスカートを身に着けている。

「そうですね。基本は自由なんですけど……お客様も見えますし、今日みたいな格好がいいと思います。もし掃除で汚れるのが気になるようでしたら、今朝つけていたエプロンのようなもので対応していただけると、ウチとしては助かります」

そうしてさらりと続けた。

「エプロン、諏訪さんによく似合っていましたよ」

再びドキッとしてしまう。小さな声で、「ありがとうございます」と言つと、「いえいえ」と軽や

かに返された。

こんな素敵な人に恋人がいらないなんて本当だろうか。まだ独身つてことすら信じられないくらいだ。でも、万が一、恋人がいなかったとしても、私なんか彼の相手になれるはずがない……

あんな些細な言葉にすらドッキリとして、どうしていいかわからなくなる私が、社長と親密な関係になったらどうなってしまうのか……想像すらできない。

運転する社長をそつと盗み見る。その端正な横顔をそばで見られるだけで十分——そう思い込もうとしたけれど、気持ちが揺れ動いてしまうのを止めることができなかった。

2 社内恋愛禁止

勤め始めてから二週間が経ち、八月に入った。

毎日暑い日が続いているが、仕事にもだいふ慣れ、やりがいも感じ始めている。

それと同時に、社長への想いが日一日と強くなつていくのをどうすることもできずにいた。

そんな中、みんなの忙しさにひと段落ついた週末。私の歓迎会を兼ねた暑気払いを開いてくれることになった。社員揃つてオフィスビルの一階にあるイタリアンレストラン『オステリア・セオ』に繰り出す。

私たちは店内奥の大きなテーブルに通された。社長が一番奥の席に着き、私を手招きする。

「諏訪さんは主役だからこちらへどうぞ」

嬉しい反面、うるさいくらいに暴れる心臓を意識しつつ、私は社長の隣に座った。

全員のグラスが飲み物で満たされると、今日の幹事である佐藤さんが、おもむろに立ち上がった。

「えっつ、幹事の佐藤です」

「知ってるよー」

上杉さんの声が飛ぶ。すでに待ちきれない様子で右手のグラスを上げている。

「諏訪さんが我が社に来てから二週間が経ちました。彼女は上杉さんの汚机や脱走癖にも負けず、日々我々に恩恵をもたらしてくれています。中でも……」

佐藤さんはそこで言葉を切り、一際声を大きくした。

「あの和室を取り戻せたのは、我々にとつて大きな喜びでしょう！」

佐藤さんの言葉に、周りのみんながウンウンと頷いた。照れくさいけど、そんな風に言ってもらえると素直に嬉しい。

「では社長、乾杯の音頭をお願いします」

その言葉に、グラスを持った社長が立ち上がる。

「すでに待ちきれない人がいますので手短かに。諏訪さん、よく頑張ってくれています。ありがとうございます。そして、みんな揃って元気に夏を乗り切れることを願ひまして、乾杯!!」

乾杯のあとは、どんどん料理が運ばれてきた。もちもちの生パスタやチーズたっぷりピザ、有機野菜を使ったサラダなど、どれも美味しくて私はみんなと大いに食べたり飲んだりした。

あつという間にワインが数本空になり、酔いが回ってきたのか徐々にみんな饒舌になつていく。

「優子ちゃんってカレシいるの〜?」

上杉さんの無邪気な大声に、テーブルが一瞬しんとまった。

みんなの視線を感じながら、私は小さく「いません」と答えた。

上杉さんが、「やったー」と声を上げ、何故か加藤さんも「おおっ!」と叫んで、グラスを空中に突き出した。

「自分も、カノジョいないんすよ〜」

加藤さんが私の方へ身を乗り出してくる。それに対抗するように上杉さんが胸を張った。

「俺もいないよ。それにマコツちゃんだっていないんだから!」

その言葉を聞くやいなや、大谷さんが好奇心を隠しきれないように社長に声をかける。

「社長! 本当にカノジョいないんですか?」

それをきつかげに、みんなも一斉に声を上げた。

「社長がフリーなんて信じられないです!」

「杉ちゃんならわかるけど……」

「こっそり付き合ってるんじゃないんすか?」

社長に視線が集まる中、石田さんがとぼけた調子で言った。

「もしかして訳あり? 人妻とか……それとも女子大生だったりして!」

社長は苦笑いを浮かべて言った。

「期待に添えず申し訳ありませんが、本当にいけません」

そうして腰を浮かせると「飲みすぎたかな——」と、席を立ててトイレに行ってしまった。

「逃げたな」

「逃げたわね」

みんな、口々に言っつて顔を見合わせる。

「どうしてかしら？ ただの堅物？ それとも女に興味なし？」

大谷さんが首を捻ると、直江さんも不思議そうに言った。

「私、社長にお供することが多いですけど、最近、他所ではますますイケズメンですよ」

「もしかして社長、こつち？」

石田さんがクネツとおネエポーズを取ると、すかさず上杉さんが否定した。

「そんなことないよ」

「上杉さんは、社長と大学時代からのお友達なんですよね？」

私が尋ねると、上杉さんは頷いた。

「そうそう。大学院は違うけど、大学は同じ美大の造形学部室内建築科で、四年間一緒だったんだ」

「じゃあ社長の大学時代をよく知ってるのよね？」

大谷さんの言葉に、上杉さんはニヤッと笑ってみんなを見渡した。

「大学時代のマコツちゃんは凄かったよ。聞きたい？」

みんなが一斉に頷く。私も聞きたい。

「マコツちゃんは大学ん時もモテモテでね、日替わりでカノジョがいたんだよ」

「日替わりで、カノジョ……？」

みんな怪訝な顔で、首を捻ったり、眉間にシワを寄せたりしている。上杉さんはテーブルに身を乗り出し、いたずらっ子のような顔をした。

「月曜日から金曜日まで、ゼーんぶ別の女の子がカノジョを担当するって仕組み」

佐藤さんが目をパチクリさせながら、いぶかしげな声を出した。

「月曜から金曜……って、五人もカノジョがいたってことですか？」

「うん。その日のカノジョが、講義の時にマコツちゃんの隣に座ったり、学食で一緒にランチしたりするんだよ」

上杉さんはこともなげに言った。私は、自分の理解を遥かに超えた話に絶句する。みんなも驚いたのだろう。すっかりグラスを持つ手が止まっていた。

「……予想以上ね！ イケズメンの堅物も、やっぱり大学時代は遊んでたのかあ。そうだと
思った」

大谷さんがうんうんと頷く。

社長は大学時代もモテたんだ……。納得すると共に、胸のあたりが重くなってくる。

すると、直江さんが真剣な面持ちで尋ねた。

「……カノジョ同士でケンカになったりしなかったんですか？」